

# パーティの準備



色野そらら

ある、大きなおうちには、ひとりのお父さんと、三人の兄弟がいました。

お父さんは、子どもたちを集めてこう言いました。

「これからパーティがあるのだけれも、そのための作品をきみたちに作ってほしいんだ。

これから、パパは、あなたたちに私の道具を貸すから、それを使ってなにか立派なものをつくってごらん。

たけし、君は絵がうまいから、このクレヨンをつかって。

しずか、君は紙を切るのがうまいから、このはさみをつかって。

そして、

のりすけ、君は貼り付けるのがうまいから、こののりをつかって。

パーティの時間が近づいたら、戻ってくるからね。

その間に、紙や本など、好きなものは使っていいから、なにか作っておいてくれ。」

そういうと、お父さんはどこかに出かけていきました。

たけしは、

さっそく、クレヨンを使って、

大きな紙に、絵を描いていきます。

しずかも、

じっと考えていましたが、たけしの書く絵に合うような形で切り絵を作っていきます。

さて、のりすけはというと、

のりを使ってやるのが思い浮かびません。

のりを手にしたまま、することもなく、たたずんで、ほかの二人の作業をうらやましそうに見ているだけです。

さあ、

たけしの描いていた絵が、七色の虹に、都会と大地の風景というふうに、立派になっていきます。

それに加えて、

しずかの切ったお星さまや、雲がそのキャンバスを飾っていきます。

のりすけは、何か悔しくなりました。

自分が、クレヨンや、はさみを与えられておらず、のりなんかで何かしろといったお父さんが自分を小さく見ているようで悔しかったのです。

そして、たけしやしずかが、自分の与えられた道具をうまく使いこなして、一生懸命何か作っているのを見て、いよいよ腹立たしくなってきました。

のりすけは、とんでもないやがらせを思いつきました。

どうせなら、こののりを使って、たけしやしずかの足や手やお尻をべとべとにしてやろう。

のりすけはこっそりと、作業に夢中になっている二人の周りにのりをこぼしました。

たけしが言いました。

「のりすけー。そののりを使って僕らの作品を手伝ってくれ。一人にしてごめんね。君の出番だよ。

それがないとこの作品は完成しな・・・

うわっ！！」

と、たけしが手を置いたところに、のりが敷かれていて、たけしの手はのりまみれになってしまいました。

「どうしたの？」

と、しずかが立ち上がって一步を踏み出すと、しずかの足にものりがひつつき、ベタベタです。

のりすけは知らんふりをして、トイレに行くふり。

ちょっと心残りはありましたが、遠くからその姿を見て一人で廊下で大笑いしていました。

そこに、お父さんがニコニコしながらかえってきました。

「会場にぞくぞくと楽しい人たちが集まってきているよ。

そろそろ開場なのだけれども、君たちの作った作品が、パーティ会場に飾られることになった。

さあ、作品を見せてくれ。」

たけしは、洗った手を拭きながら、

笑顔で言いました。

「見てみて、パパ。

僕は、パパから借りたクレヨンで、素敵な世界の風景をかきあげたよ。

どう？」

お父さんは、それを見て、たいそう感激しました。

「たけし、お前はうまい絵を描くなあ。

クレヨンなんかじゃ物足りないだろう。

あとで、水彩絵の具のセットを渡してあげよう。



もっと頑張りなさい。」

と、お父さんはたけしをたたえました。

次に、

しずかが、足を拭きながらいいました。

「見て、パパ。

私はパパのはさみを使って、お星さまや月や星などの切り絵を作り、たけしくんの絵をデコレーションしました。

どうですか。」

お父さんは、それをみて感心しました。

「しずか。あなたもよくがんばったね。

はさみ一本じゃやりにくいこともあるだろう。

あとで、ものさしやコンパスも渡してあげよう。

さらによくなることを期待しているよ。」

と、お父さんはしずかを、ほめました。

最後に、

顔をお父さんからそらしながらうつむいているのりすけが

余ったのりを見せて、ぼそっと言いました。

「パパ……。

こんなのりだけじゃ僕はなにもできなかつたから、何もしていません。

こののりは、パパのだし、おとなしくそのまま返すね。」

パパは、のりを受け取り、

そののりの中身が減っているのを見て、悲しそうな顔をして言いました。

ほかの二人のしぐさを見て、のりすけが何をしたのかもわかりました。

「のりすけ、よく聞きなさい。

私は、あなたに、こののりを使えば、あなたは素敵なことができるかと信じて貸した。

それなのに、こんなひどい使い方をして。

二人はなぜ、体を洗っていたんだい。」

「僕は・・・何もしてないよ。」

のりすけは、パパの前で嘘をつきました。

怒られるのが怖かったし、自分のしたことがばれたらパーティに行けなくなると思っていたのです。

パパは、のりすけの心を見抜いて、言われました。

「なぜ、あなたは、私が怒ったり、罰したりすると思うんだ。」

正直に言って、あやまれば、許して、一緒にパーティを楽しもうと思っていたのに。

それに、あなたには、たけしの絵とせずおの切り抜きを張り付けて一つにできる仕事があったじゃないか。

さあ、のりすけ、そののりを返さない。

これは、あなたに使われるよりも、あとの二人に使ってもらった方がよっぽどいい。

さあ、二人とも、こののりを使って、作品を完成させなさい。

そして、パーティに行こう。

のりすけ、君はしばらく、そこで反省していなさい。今、君には何をやる資格もないのだから。」

のりすけは、机に座り、動くことも作業をすることもできず、じっとすること以外できませんでした。

悔しくて、「なんで自分だけがこんな目に合わねばならないのだろうか」と思うと、涙がぽろぽろこぼれてきます。

作品が完成しかかって、先生がみんなに呼びかけました。

「さあ、この作品をもってパーティに行こうか。」

のりすけは、自分もそのパーティに呼ばれていることを知っていましたが、

後ろ髪をひかれて引かれて、立ち上がる気にもなれません。

こんな心のまま、パーティにいても絶対に楽しめないことを知っているからです。

二人は少し悲しそうな顔をして、机に取り残されたのりすけのことを気にかけています。

お父さんは、黙ったままです。



たけしが、口を開いていました。

「パパ、こんなのじゃ、僕たちは楽しいパーティに行けないよ！

いくら、のりすけが僕たちに悪いことをしたからって、一人だけおいてけぼりは、僕たちもつらいよ。」

「そうよそうよ。」

しずかも口を開きます。

「本当は、この作品はまだ完成していないの。

のりすけにしか貼り付けることのできない箇所があって、それがないとこの作品は死んだままなの。」

「・・・・・・・・」

沈黙が流れます。

お父さんは言いました。

「のりすけ、ふたりがああいつてるぞ。どうする？」

のりすけは、それを聞いた瞬間、大声でわんわんと泣き出してしまいました。

そこで、のりすけは、やっとしゃくりあげながら、声もたえだえに言いたかったことを全部言いました。

「う・・・えぐっ、えぐっ。

たけし、しずか、ごめんなさい。のりをまいたのは僕です。」

「いいよ、もう済んだことだし。

でも、なんであんなことをしたの？」

「ぐやじがったんだよー。

君たちは、ものすごくいろんなことができ、パパにも認められているのに。

なんで、僕だけ、僕だけが、小さなことしか与えられないし、褒められないし認められないんだー！パパはどうせ僕のことなんか嫌いなんだ！」





パパが、近づいてきて、のりひこの前に座ってやさしくこういいました。

「それは違うよ。のりひこ。

あなたに必要なものはみんな貸してあげた。それは、あなたにしかできないことなんだ。

あなたののりがなければ、この作品は決して完成しない。

たけしの絵も、しずかのはさみも、ほかのだれにも替われないお仕事で、それはあなたも一緒なんだよ。それなのに、なぜ他人と比べたりしたり、人の役割を邪魔しようとしたんだい。」

「パパ。せっかくパパが、僕のことを考えてくれたのに・・・ごめんなさい！

パパ、ごめんなさい。」

パパは、「よし、よくその言葉を言えたな。偉いぞ。」と、のりひこを抱きしめました。

のりひこは、大声で泣きました。

それを見ていた、たけしも、しずかも涙を流しました。お父さんも思わず涙を流しました。

「よし、じゃあ、この作品も、あと最後の詰めが残っている。

頼んだぞ！のりひこ！」

最後、三人は協力し合って、無事に立派な作品を完成させ、パーティにもっていくことができました。

そのパーティでは、パパも、子どもたちも、みんな一人ぼっちになることなく、この上なくなかよく、楽しむことができましたとさ。

このパーティの日の出来事は、先生にとっても、子どもたちにとっても、忘れることのできない大切な思い出になったということです。

◆おしまい◆

モデルとなったお話は、

マタイによる福音書の25章、および、ルカの19章の

「家来にお金を貸した主人が、儲けた人にはさらに多くをあたえ、何もせずに儲けないでとっておいた人は全額没収した」という、

いわば、

「持つものはさらに多く与えられ、持たないものは持っているものまでも取り上げられる」というたとえ話です。

つまり、

「魂それぞれに、神様から与えられた才能があるから、使ってこの世界をよくする義務がある」

「神から与えられた命や魂は、きれいに磨いて返すと、神様からはご褒美が来るよ。」

「与えられたものをふてくされて使わないのは罪だよ。」

ということで、

言いたいことは非常によくわかるのです。

なのですが、しかし、ですよ。

ハッピーエンドではないし、

なにか冷たい感じがするのです。したのです。

途中まで、書きながら、このバッドエンドの背景にはなにがあるのかと考えたら、

やっぱ、どんな人にも、

「大切にされたい」「愛されたい」

という欲求があるわけなんですね。

それが、満たされていると「感じていない」「気が付かない」

だから、

同じ家の兄弟に嫉妬したり、ひねたり、いじわるをしたりするわけなのです。

そして、「自分は愛されていない」

だけでなく、

「悪いことをしてしまったから、パパにも兄弟にも顔を向けられない。怖い」

「もう、どこまでも逃げ続け、隠し続けるしかない。」

というのが、

まあ、地上のあらゆる人の苦しみなんだと思いますね。

パーティがあるのに、自分で行けなくしてしまって、  
自分でひねてしまい、どうしようもなくなってるんですよ。

愛されるのを拒否ってる。

つまるところ、根本は、そこです。

形が、どうあろうが、  
量や大きさが違おうが、

「おまえさん、これ使って魂の収穫しな」と与えられたものは、ちゃんとかならず素晴らしい使い道があるはずなんですよ。

人と比べたりしているうちに、そこを見失ってしまう。

で、ちゃんとそういうことを自覚して、小さいことでも忠実にやってると、  
「じゃあ、もいちょっと大きなこと任せてみようか、お願いします」って、  
お金やチャンスや役職が与えられるかもしれない。

そうやってね、自分に与えられたもので、「パーティのための作品」を仕上げたって、  
心残りなく、作品が完成して、パーティに行った時の嬉しさというのは、  
きっと素晴らしいでしょうねえ。

みなさんも、自分に与えられた、そういううれしい才能を、楽しく使っていかなきゃいけませんよー。

このおはなしがあなたの人生のヒントになれば幸いです。

2014年10月 色野そらら

